むさしの TALK

村松友視さん

住人たちがつくってきたまち。どこか“決まり切らない”感じが良いね

まちが発展していくさまを長く見てきた直木賞作家の村松友視さん。
数々のまちを舞台に作品を描いてきた作家が思う、住み心地の良いまちとは？

吉祥寺に住んで、もう40年近くになります。引っ越してきた当時は、まだ今のようなしゃれたまちではなかったですね。ハーモニカ横丁がもっと渋くてかつお節屋とか乾物屋が軒を連ねている、そんな雰囲気が良いなと思った記憶があります。

僕はもともと小説『時代屋の女房』で描いた、競馬、パチンコ、キャバレーがある大井町に住んでいました。結婚してカミさんと一緒に住むには手狭になり、ここに引っ越してきたわけです。吉祥寺に決めた理由は、たまたま不動産屋に紹介されて。縁があったということですね。

学生時代からのモダンジャズ・ファンでもなかったけれど、吉祥寺のこの店、野口伊織さんがつくったジャズ喫茶「FUNKY」には、魅力を感じました。野口さんは吉祥寺にジャズの魅力を広めた人ですが、そのほかにもいろんなジャンルの店を吉祥寺で展開しました。彼がいくつか石を打ったことに呼応するように、ほかの人がまた全然雰囲気の違う店をつくっていって、まちがにぎやかになってきたことを思うと、野口さんは店をつくったと同時に、まちもつくっていったんじゃないかなと思うんです。行政や鉄道会社が計画的につくろうとしたまちではなく、住む人がつくったまち。だから決まり切らない面白さが吉祥寺にはありますね。道が入り組んでいたり、繁華街を歩いていたと思ったら急に住宅街になったりするんだけど、まちの趣としては、実はそこが良い。

こういう適度な柔らかさが、自分の住むまちにはあってほしい。湯加減で言えばグラグラしすぎず、かといって風邪をひくほどぬるすぎでもない、よい湯加減ってところですかね。

村松友視（むらまつともみ）

1940年、東京生まれ。出版社勤務を経て、作家となる。1982年に発表した『時代屋の女房』で第87回直木賞受賞。『鎌倉のおばさん』で第25回泉鏡花賞受賞。人間味あふれる登場人物を描き、多くのファンをつかんでいる。人物伝も多く執筆。近著に、95歳にして今なお現役の画家として活躍している堀文子を描いた『極上の流転』（中央公論新社）がある。

PRESENT

今回取材した、村松友視さんの直筆サイン本「極上の流転」を抽選で5名様にプレゼント！ 詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。